



【フロウ】 Flow



福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。

Okuizumi news Flow



奥会津をつなぐ人々

山ブドウ、ヒロロ、マタタビなど自然の恵みを使い、暮らしの道具をつくる。深い雪に覆われる三島町で、冬の手仕事として親から子へと受け継がれてきた奥会津編み組細工。その技と心は今、町外出身の若い世代に伝えられている。

若き工人、未来を編む

町の工人が講師となり
編み組細工を基礎から習得

「ものづくりが好き」。それが、会社勤めを辞めて縁もゆかりもない三島町に彼女たちが来た理由だ。福島県会津美里町出身の小林由佳さんと、東京都武蔵野市出身の崎山志帆さん。二人は平成31年(2019)4月、技術の継承や担い手の確保などを目的とする「三島町生活工芸アカデミー」3期生として町に移住してきた。アカデミーで1年間奥会津編み組細工の基礎を学び、現在は生活工芸伝承生として『生活工芸館』に勤務しながら技術を磨いている。

アカデミーの講師は、伝統工芸士をはじめとする町の工人たち。国の伝統的工芸品に指定されている山ブドウ、ヒロロ、マタタビ細工のつくり方を一から教わった。「工人さんって職人気質で厳しいのかなと思っていましたけど、皆さんすごく優しくかったですね。何回も同じことを聞いても『それはわかんねーべな、初めてだもん』って親切に教えてくださいました」と崎山さん。「伝承生となった今も、工人さんに作品を講評してもらっている」とアドバイスをいただいていますと小林さんが続ける。

アカデミー生時代には、農山村生活実践体験として地域住民に教わりながら畑づくりにも挑戦。さらに集落の行事への参加や郷土料理体験などを通して町民たちと交流を深めた。「最初は半分からいしか方言がわからなかったのですが、今はだいたいわかります(笑)。(崎山さん)と、二人ともすっかり町の暮らしに溶け込んでいます。



Flow
雑記帳

<https://www.okuizumi100.jp/flow/>

奥会津をつなぐ人々

材料採取から手間ひまかけて つくり上げる誠実な手仕事

奥会津編み組細工づくりは野山での材料採取から始まる。山ブドウは6月の2週間程度、ヒロコ細工に使うモワダ(シナノキの内皮)は6月後半から7月頭・アカソは7月頭・ヒロコは8月後半、マタタビは11月から3月と、素材によって採取時期も場所も異なる。山の中の道なき道を行き、10キロ以上以上の樹皮を背負子(しよいこ)で背負って歩くこともあるが、「すごく楽しい」と崎山さんは笑う。「藪の中には棘がある草もあるし、夏は蚊がすかさず刺さったり蒸し暑くて汗がパツと出るんですけど、生きてるなって感じるんです(笑)。自分で材料から採ってものづくりができるのが奥会津編み組細工の魅力の一つだと思います」

採取後は素材ごとに乾燥させるなどの作業をしてから、ようやく編む工程に入る。なかでも手間ひまがかかるのはモワダだと、小林さんが教えてくれた。シナノキの樹皮を1ヵ月ほど水につけて腐らせると、内側の皮が剥



ヒロコの縄(な)いの様子。縄にしてからモワダやアカソも使って編み上げるヒロコ細工は、レース編みのような繊細さが魅力だ



山ブドウやヒロコのバッグ、マタタビのザルなど、小林さんと崎山さんの作品も含め工人がつくった奥会津編み組細工は生活工芸館で展示・販売している

三島町生活工芸館

三島町大字名入字諏訪ノ上395
TEL:0241-48-5502
開館時間:9:00~17:00
休館日:月曜日(祝日の場合はその翌日)・
年末年始
入館料:無料



けるようになり。川で洗い流して、手で薄い皮を一枚一枚きれいに剥がし、天日干しで乾燥させ、乾いたらヒロコ細工に使える材料になります」。先人の知恵に感心すると同時に、一つの奥会津編み組細工が出来上がるまでにかかる途方もない時間と労力を知り、工人たちの誠実で丁寧な手仕事に感動する。

奥会津編み組細工づくりを始めて3年。その魅力について二人はこう話す。「みんなで車座を組んでおしゃべりしながら自分の好きなものを楽しくつくり、生活の中で使う」。三島町生活工芸館にあるこの考え方が、素敵だなど思っています。この考え方が根底にあるので、工人さんたちがつくるものもそれぞれの個性が出ていて、温かみがあって好きです(崎山さん)。「編み組細工は丈夫なので百年くらい保(も)つんですね。古くから受け継がれてきたものがあることもすごいですし、それを自分でつくっていることも嬉しい。そこが奥会津編み組細工の魅力だと思いますし、次の世代に受け継いでいくことの大切さを感じています(小林さん)」



崎山志帆さん(左)・小林由佳さん(右)

山ブドウ細工とマタタビ細工が特に好きという小林さん。東京出身の崎山さんは山が好きで、地方移住に関心があったそう。生活工芸伝承生2年目の現在は、生活工芸館で展示・販売する奥会津編み組細工の制作と技術の向上に励んでいる



編集後記

平成12年(2000)から発行されてきた「奥会津だより」。歳時記の郷・奥会津に今も息づく伝統・風習・言い伝えなどを奥会津から全国へ発信してきました。

その「奥会津だより」を今号からリニューアル!「新・奥会津だより『Flow』」として装いも新たにしました。

奥会津の伝統・風習をこれまでどおり丁寧に取材、記録し、全国の皆様によりわかりやすく、親しみやすくをモットーにお届けします。

奥会津には、日本の原風景ともいえる景観に加え、古くからの伝統を残し、また、その伝統を現代に活かしながら自然と一緒に豊かな暮らしを営んでいる人々がたくさんいます。

私たちはこの奥会津の自然と一体となった豊かな暮らしを、100年先につなげていくために、奥会津の昔・今・そして未来をこの「新・奥会津だより『Flow』」を通じて皆さんにお伝えしていきます。

編集問合せ先

新・奥会津だより「Flow」編集部(株式会社日進堂印刷所内)
〒960-2194 福島市庄野字柿場1-1
TEL:090-6852-0953(専用電話) FAX:024-594-2041
Eメール:flow@nisshindo.co.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。
奥会津だよりの定期購読を希望される方は、編集部まで、発送先(ご住所・お名前)をお知らせください。
個人情報の取扱いにつきましては適切に管理を行っています。詳しくは、日進堂印刷所のホームページをご覧ください。



自然の中に暮らすいとなみ、100年先のみらいへ。



最新情報はホームページでご確認ください。

只見川電源流域振興協議会 事務局

〒968-0006 福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地
東北電力奥会津水力館「みお里」奥会津振興センター内
TEL:0241-42-7125 FAX:0241-42-7127
Eメール:tdrsk@okuaizu.net

只見川電源流域振興協議会の主催・共催事業については、最新情報をホームページで随時公開しています。
この冊子は電源立地地域対策交付金の事業より作成されています。

ただでん 掲示板 vol.1

只見川電源流域振興協議会からのお知らせ

自然の中にくらすいとなみ、100年先のみらいへ

第4期只見川電源流域振興計画の基本理念は、伝統と文化に基づき、自然と調和した奥会津の豊かな暮らしを100年先まで続けていくこと。

この基本理念に向けて、奥会津に関わるみんなの活動が大切です!!



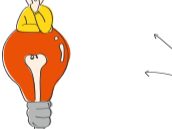
作ってみよう。



見せてみよう。



一緒にいこう。



発見しよう。



発信しよう。



語ろう。



教えよう。



伝えよう。



食べてみよう。

新しい仲間が増えました!

奥会津地域おこし協力隊 KOUSUKE SAKURAZAWA

今年の5月に奥会津地域おこし協力隊として奥会津振興センターに着任いたしました櫻澤孝佑です。現在は、奥会津に眠る価値や魅力を掘り起こし、発信していく仕組みづくりに取り組んでいます。

奥会津には、雄大な山々やその間に悠然と流れる川があり、ダムや鉄橋なども、このスケールの大きな景色の一部と感じています。奥会津の地域で、100年後の未来へ向けて皆さんと一緒に活動していきますので、よろしくお祈いします!



さくらざわ こうすけ
櫻澤 孝佑 埼玉県出身



奥会津の 美術館 資料館

QUIZ

奥会津
博物館からの
クイズです！

江戸時代、奥会津地域では農村歌舞伎の文化がおおいに花開きましたが、お隣の会津藩領内では広まりませんでした。それはいったいなぜでしょうか？

答えを知りたい方は
奥会津博物館へ

Go!



職員・渡部陣一さん(左)、
湯田聖子さん(右)



DATE

奥会津博物館

詳しくはこちらから



南会津町糸沢字西沢山
3692-20

TEL:0241-66-3077

開館時間:9:00~16:00

休館日:年末年始

(12月28日~1月4日)

冬期(12月~3月木曜日)

入館料:大人300円、

高校生200円、

小・中学生100円

奥会津博物館 見て、体験して、奥会津の多彩な文化に触れられる施設



江戸時代創業の染屋。最盛期は町内に16軒あった

“東北の玄関口”奥会津の文化を3つのテーマでわかりやすく展示

江戸時代、幕府直轄地「南山御蔵入領」だった奥会津。下野街道や上州街道によって関東と結ばれ、多くの人や物が行き来する交通の要衝として栄えていた。「今でこそ会津の奥地というイメージですが、当時の奥会津は東北の玄関口で、文化がいち早く入ってくる地域だったんです」と、『奥会津博物館』職員の渡部陣一さんが教えてくれた。会津漆器を支えた木地師の文化、山河の恵みをいただく狩猟や漁労、下野街道の交易を担った民間の輸送業者「仲付驚者(なかづけどじや)」、100以上の村々で上演されていた農村歌舞伎……。奥会津の厳しくも豊かな自然に育まれ、この地ならではの多彩な文化が発展した。奥会津博物館では、国の重要有形民俗文化財「奥会津の山村生産用具」に指定されたものも含む約3,000点の生活用具や道具を「山」「川」「道」の3つのテーマに分けてわかりやすく展示。当時の人々の暮らしと奥会津の文化を立体的に学ぶことができる。職員の解説(要予約)を聞きながら見学すれば、よりディープに楽しめるのでおすすめです。

大河ドラマのロケ地となった歴史ある「染屋」で藍染体験

広い敷地内には茅葺き屋根の古民家が4棟、移築復元されている。その一つ、旧杉原家住宅は江戸時代中期から昭和40年代まで藍染を業としていた「染屋」。昨年8月にNHK大河ドラマ「青天を衝け」の撮影が行われ、話題となったことも記憶に新しい。

南会津町では200年以上前から藍染が行われており、明治から昭和初期には町内に16軒の染屋があったという。会津田島祇園祭に着る麻の袴地を染める役割も担ってきたが、現在はほとんど残っていない。奥会津博物館では平成16年(2004)の開館当初から藍染文化の継承に取り組み、「田島藍染保存会」と協力して藍の栽培や藍染体験事業などを行っている。染屋の土間には染料が入った石造の藍甕(あいがめ)が並び、歴史を感じながらハンカチや手ぬぐいの絞り染めを体験できる(1,000円~)。絞り染めの仕上がりは十人十色。2時間ほどで世界に一つだけの美しいジャパンプルーが完成するので、ぜひお試しあれ。



藍染体験はGWから9月末(今年は12日)まで。要予約



やないづ縄文館

詳しくはこちらから



縄文中期~後期の土器を中心に、柳津石生前地区で発掘された土器や、復元された竪穴式住居を展示している。

柳津町大字柳津字下平乙151-1

憩の館 ほっと inやないづ内

TEL:0241-41-1077

開館時間:9:00-16:00

休館日:第2・4木曜日

入館料:無料



妖精美術館

詳しくはこちらから



井村君江さんのコレクションである絵画や絵本のほか、天野喜孝さんが手掛けたステンドグラスも展示してある。

金山町大字大栗山字狐穴2765

TEL:0241-55-3180

開館時間:9:00-17:00

休館日:水曜日

(祝日の場合は翌日)

入館料:高校生以上300円

小中学生200円



からむし工芸博物館

詳しくはこちらから



昭和村のからむし生産・機織に関する資料や用具などが展示されており、からむしに関わる昭和村の歴史や生活を学ぶことができる。

昭和村大字佐倉字上ノ原1

TEL:0241-58-1677

開館時間:9:00-17:00

休館日:不定休、年末年始

入館料:高校生以上300円

小中学生150円



ふるさと館田子倉

詳しくはこちらから



田子倉ダム建設の際に湖底に沈んだ田子倉集落の歴史、生活文化等について貴重な資料展示とともに解説している。

只見町大字只見字田中1299

TEL:0241-72-8466

開館時間:9:00-17:00

休館日:火曜日

(祝祭日の場合は翌平日)、

年末年始

入館料:高校生以上310円

小中学生210円



武田久吉
メモリアルホール

詳しくはこちらから



尾瀬の自然保護活動に尽力した理学博士・武田久吉の資料館で、カメラなどの所持品や貴重な資料が展示してある。

檜枝岐村字左通124-6

(ミニ尾瀬公園内)

TEL:0241-75-2065

開館時間:9:00-17:00

入館料:2021年8月1日~

11月3日まで無料

4月~8月 大人500円、子供200円

9月~11月 大人200円、子供100円

(ミニ尾瀬公園入園料に含む)

アイコンの見方



美術館



博物館



資料館



記念館



展示館、展示場



歴史的建築物や史跡等



冬季休業

令和の奥会津風土記

～むらをあろく～ 只見町(只見地区)

奥会津各集落の、歴史や暮らしの記憶を残す場所を訪ねて、過去と今を結び、新たな未来を拓こうと地域住民自らが調べ歩きます。

会津学研究会 菅家 博昭

会津藩が文化6年(1809)に『新編会津風土記』(以下『新記』)をまとめたが、各村から報告された内容がすべて採用されたわけではないことが先人の調査で明らかになっている。記載事項が事実かどうか確認していくことが求められている。赤坂憲雄氏(学習院大学教授・民俗学者)と昨年歩いた村々についても、『新記』の記載内容を実際に現地を歩いて確認し、現存しているもの、変化しているものを記録し、その一部を本紙に報告した。

前年から新型コロナウイルス感染症の感染拡大が止まらず、東京在住の赤坂氏の来県が実現しなかったなかで、むらあるきを再開している。

菅家博昭
プロフィール

1959年生まれ、昭和村在住、花農家。会津学研究会代表、昭和村文化財保護審議会委員長を務めるなど、会津地域を中心に調査を続けている。著作に『芋(からむし)～地域資源を活かす生活工芸双書』『暮らしと繊維植物』など。



ひとつの祠に祀られた水神と山神

石祠でたどる只見の歴史

6月19日、雨の日、只見町を歩いた。

『新記』の只見村には「家数94軒、散居す。村中に制札がある。只見新田という端村があったが今は廃す」とある。柴倉山(雑木多し)、只見川、大沼がある。船渡場があったと、渡守の宋左衛門の寛永2年(1625)の文書に記載されており、伊北(いほう)の4カ所の舟越を管理していたことがわかる。

伊北とは古称で、伊南に対応し界村(南郷地区)を境界としている。伊北布(アサ織)という他所でも有名なブランド品を産出している。現在の南郷トマトに比定されるだろうか？

今回、只見在住の鈴木サナエさん等が同行されたので、現在伝承されている「田ノ口」の事などを聞くことができた。只見村を拓く「田ノ口」という伝承は、今後の調査の課題である。

一般に水神、山神は別々に祀られることが多いが、江戸時代に建立された只見地区の二神をともしする事例はたいへんめずらしい。今回は主にその石祠を訪ねた。



昭和村小中津川に気多神社があり、かつて長野史学会の一志茂樹先生が注目されたことがある。この北陸の神様の地区にも「田の口沢」という大芦村とつなぐ峠があり、大芦村は界村と鳥居峠で結ばれている。さらに只見、八十里越と日本海をつなぎ、カラムシ繊維を平滑にするために海藻の「ふのり」が使われることになる。



田ノ口の一番早く拓いた田。現在は休耕している



地域を見守る水神・山神

① 柴倉橋のたもとにある石祠をたずねた。ホオノキや針葉樹など多様な樹種を残した場所にある石祠には前面に「水神 山神」、側面に寛政6年(1794)と陰刻されている。そして正面に縦長の窓が2つ開いている。このような特徴ある石祠は鈴木克彦さんの調査で3カ所ほど確認されている(『只見町川と人の物語』2014年)。



柴倉橋のたもとの石祠・水神と山神



左に山神、右に水神(赤布の下には二つの窓)



正面は赤い布で覆われている

② 只見の街路には水路が巡らされ、その上町のかつて鹿島と呼ばれていた場所の水神・山神石祠はユキツバキのなかにあった。この祠にも2つの窓がある。



2つの窓がある上町の道路沿いにある水神と山神



水路は各所に張り巡らされている

③ 菅家誠也さん宅地内の川除地蔵も見通しのよい自然堤防端にあり、近くに石塚も確認された。2011年7月の洪水時には住民救助でボートを出したり、只見街路が一面、濁った水に満たされたという。地蔵の脇には平地林(広葉樹)も下面にみられ、雪国の樹林育成の話も聞いてみたいと感じた一日であった。



自然堤防の端にある川除地蔵



川除け地蔵の背後の石塚



地蔵尊の下段には美しい広葉樹の林がある



ヤマボウシの白い花が目立つ年のようで、サナエさんは「ヤマグワの花が良く咲いている」と言った。聞くと、只見地域ではヤマグワと呼ぶのは白い花のヤマボウシをさすのだという。

会津学とは…

赤坂憲雄氏(民俗学者・作家)が提唱した「東北学」を発展させ、地域学の一つとして2005年に会津からはじまった。民俗学の手法で地域の新たな歴史や風土を掘り下げ、捉え直していこうとする試みである。

写真:菅 敬浩・菅家博昭・鈴木サナエ
今回は昭和村を歩く。